

- ・多摩川を今朝も渡りて楽しめぬことのみおほくなる壮年や
- ・人厭ふころたかぶりゆく秋に分ける雑木の林のしづか

まだ青年期と呼ばれる人生の時間にあつて、小紋潤はどこか強い断念の影を漂わせていた。それは最初に出会ったときに感じたかすかな印象であつたが、友人として会い、そして飲むほどに、彼から積極的な人生の構図といったものがほとんど感じられないことに、私はいつからか歯痒い思いを抱いていたように思う。「二十にして心までに朽ちたり」という波長を、彼はどこからか確かに漂わせていたのである。

決して表に出ようとしない、ある意味で影に徹する。編集者としての立場もあつただろうが、歌人としてもっと自己顕示があつてもよきそんなものを、常に裏方にまわるといふ役回りを自らに課しているようなところがあつた。それが何に由来するものかはわからなかつたが、常に相手を立て、細かいところにも心を配る、そんなやさしさの影に、ある種、断念したものだけが持つ冷徹な視線を感じたことも一度や二度ではなかつたらう。

若手歌人に対しては、彼らを頻繁に自宅に誘い、飲ませ、意見をしていたことを知っている。俵万智を含め、谷岡重紀、黒岩剛仁、大口玲子など「心の花」の若手を育てたのは小紋潤であつたはずだ。兄貴分としての彼の喜びであつたことは間違いない。しかし無私に徹するかのように若手の面倒を見る、そこにはどこか、己への断念の代償としての意味が含まれていなかっただろうか。

先の歌に見える、「まこと孤りの己れと思ふ」「よるべなき思ひにあれば」「楽しまぬことのみおほくなる壮年」「人厭ふころたかぶりゆく」など、どれもネガティブな感情であるが、そのような日常の鬱屈を抱えていることが、彼の酒の歌のベースにあることを改めて知る。李賀の二行に暗示したかつた思いでもあろう。

・希ふことあまたありたるそのなかのひとつことさへ叶はぬものか

自らのためには何もしなかつたような小紋に、「希ふことあまたありたるそのなかのひとつこと」が生れたのを私たちは知っている。そのたつたひとつの希いさえ「叶はぬもの」となつた経緯もおぼろげながら

理解している。歌集後半になると、それが、次のような歌となつて現れる。

- ・後の世まで見る夢ならんいとけなきわが子無辜なることを喜ぶ
- ・肩車よろこぶ声は父よりも高きところに麒麟を仰ぐ

いつ来てもライオンバスに乗りたがるライオンバスがそんなに好きか  
 ・ちかづけば鞆たばこゆるる夕ぐれや姿なき子が漕ぐと思ひぬ  
 ・捨て置かれ乗るものなき三輪車きづなといふはいかなる時間

これらの歌を前にして、私はほとんど言葉を失う。あれだけ無私に徹しつつ、その唯一の水際で望んだ「ひとつこと」、その重みは、私のような読者にもひしひしと辛い。私は、歌に泣くなどほとんどない人間だが、これらの歌には思わず涙ぐんだと正直に告白しておきたい。

小紋潤の『蜜の大地』は、静謐で、本格派で、抒情の質が高く、などなどさまざまにその良質の性質を抽出することができるとであらう。そのうえで、この一巻は、私にはなにより切ない歌集なのであつた。